

\*\*\*\*\*

一部50円です

\*\*\*\*\*

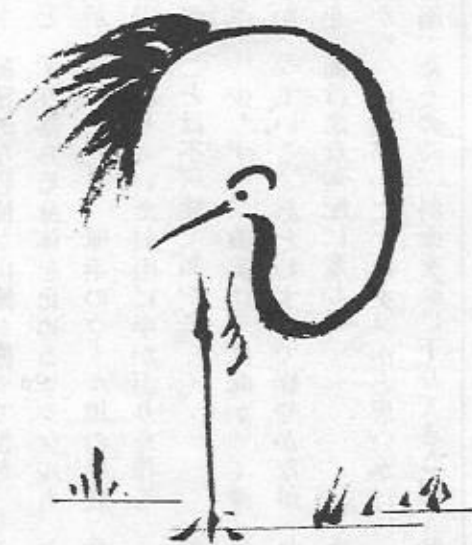
## 亀と鶯

夕暮れどきの川岸に立ち尽くす鶯は鳥と思えない風格を小さく細い足から感じる。寒の時雨れどきに微動だにしない姿は流木の一枝と錯覚するぐらいに夕闇の中に溶け込んでいた。餌の小魚を狙っていきそうな鋭い視線を川瀬に向けている昼間の緊張感は消え、虚空の闇にただ立っている。立ち寝をしているのかと疑いたくなるが、凜として動かない静けさは妙に心をなだめてくれる気がしてくる。この鳥は群れでいる事はない。2羽いる時もたまにあるが、いつもは独り突っ立っている。

亀は早朝の甲羅乾しが面白い。日が上がると岸边の岩の上に這い上がってきて甲羅を日に向けて体温を上げる。思い切りのぼした頭から臆病そうな目を開けて警戒している。何か近づくと急いで水中に逃げ込むのだが、すぐには潜らず頭を水面から出して様子を伺っている。水中でも機敏な動きをするわけではない。陸上でも水中でも極めてマイペースな生きものである。亀を獲り食べる人がいないからであろうか。すっぽん料理はあるが川の亀料理は聞かない。

亀ののろまな動きを見ていて、何のために生きているのか不思議に思えてくる。鶯も同じように見えてくる。雀は焼き鳥にでもなる、鯉はあらいにして食える。

亀と鶯は、「四天王寺の亀・姫路の白鶯城で十分ではないか。好きなように考えて。暇人とよう付き合わんわ」と思っているのかもしれない。



先月、恩師のまつおかはんから小学校の同級会をしてくれと電話をもらったので直ぐに案内状を皆に送って会場も手配した。十年ぶりの会なので参加者も多いかなと思ったが、不景気だし新型インフルエンザもあって少ない人数で予約した。参加希望者は予想を下回ってカッコがつかないような状況になって来た。電話して何とか誘うも予約人数に達しない。「あと二人何とかせいや」と同級生に頼む。そんな状況の時、恩師から「やつぱり、会に出席するんやめるわ」と弱気な電話。「何言ううとてんやいな、先生!」と私は言った。「年寄り気ままに困ったものだ」と友とぼやいた。そんなやりとりを一週間ほどやり、いよいよ当日になった。冷や冷やして待っていると先生は来られた。酒が入れば心配した事がウンのように元氣な先生であった。

後日、老体を晒すことを躊躇された先生の気持ち理解できるようにになった。人目に己の醜態を見せたくない。古くからの知り合いほど、老いぼれた自分を見られるのが辛いのである。脳卒中で倒れた先輩から見舞いに来るなど伝言もらったのも同じ理由だろう。

そんな想いを適えてくれそうな爺捨て山は大事に思えてくる。

## 風神の聖岳 ②

梵店主

よっちゃんの目の中に、真上から山猿がバランスを崩して滑る姿が、突然飛び込んで来た。山猿が叫ぶでもなく、登っている部員達が声を発することもない。

「ストップだ。山猿！」の声をかけることさえ出来ないほんの僅かな時間であつたのだ。数秒という時間すらなかつたかもしれない。「あつ」と言う間の出来事であつた。スロウモーションのように見えたのは予期しない二年が滑った事による恐怖心が心を凍らせてしまつたからだろうか。

よっちゃんは、何も考えることなく無意識に、自分めがけて滑落してくる山猿にたいして身構えた。三十キロの荷を担いだ山猿が、斜度四十度もありそうな雪氷の斜面を、アイゼンを付けた靴底をよっちゃんに向けて滑り落ちてくる。よっちゃんは足を大きく開きピッケルを両手でもって前に深く突き刺した。仰向きのまま足を大きく開いた山猿は加速して滑ってきた。次の瞬間、山猿は凄いでよっちゃんにぶつかった。よっちゃんが全体重をかけて止めようとして突き刺したピッケルに山猿の右足が当たった。

その弾みでよっちゃんは左手後方に飛ばされた。十メートル近く飛んだ。山猿は右手後方に同じように飛んだのであつた。

よっちゃんは一瞬の事故後、すぐに斜面にピッケルを突き刺してストップ態勢になつていた。氷が土と混ざつた地表にピッケルのブレードを差し込んでいたのだ。無意識とはいいながらも、訓練のお陰かアイゼンを付けた足を折り曲げて滑落時に飛ばされないようにして、肘を絞めピッケルを握っていた。

よく見ると、よっちゃんのピッケルはシャフトの半分が折れてなくなつていたので。山猿と衝突した時、山猿の右足のアイゼンが木製のピッケルのシャフトに当たり、その瞬間折れたのだろう。誰も、その時の様子を詳しくは分らない。あまりにもモノ凄いでぶつかったので見えてはいない。

一方、山猿は飛ばされ転がりながら仰向けに止まつた。幸運にもザツクが岩の突起に引っかかったのだ。そのとき山猿は左肩が脱臼し上腕骨にひびが入っていた。岩の引っかかりがあまりのために、山猿は少しずつ滑りかけたのである。そこから山猿の恐怖が始まる。滑落しているときは全く恐怖感がなかったようだ。ありつたけの力で助けを求め叫びを張り上げたが、強風にかき消された。あと二メートル下は斜面

が急に落ちこんでいた。これ以上滑ればまぢがいなく墜死だ。

山猿はよっちゃんと衝突して止まるまでに頭や身体を岩角で打つたため、顔から血を出していた。斜面に立つことも出来ず仰向けのまま動けない。かろうじて両足につけたアイゼンを氷の斜面にうち込み、踏ん張る以外滑落を防ぐすべはない。ピッケルも折れて役に立たなかつた。

傷ついた身体の中山猿が偶然にも岩に引っかかつて、少しだけ傾斜が緩くなつた雪面に独り横たわつていた。少しづつ少しづつ降り落ちる、その斜面の下部は何もさえぎる木や岩などなく数百メートルも切れ落ちる赤石沢の溪谷が恐怖の口を開けているように思えた。

山猿は滑落では恐怖を感じるどころか、たいへん落ち着いて次の行動に移ろうとしていた。止まつた途端に絶望的な恐怖が山猿を襲つてきた。ずり落ちる身体を止めるピッケルも折れている。厚手のウール地の手袋で凍りついた斜面に手がかりを作ることは不可能であつた。

少しづつ、確実に下に向かって滑っている。あとわずかで緩やかな斜面は急な勾配に変わる。

山猿がいよいよダメかと思ひかけたその時、斜面を駆け下りてきたM

蔵が、顔面から血を流し蒼白になつた山猿の腰に付けたゼルプスト(安全ベルト)を右手でつかんだ。その瞬間、山猿の身体は滑るのを停止した。M蔵はザイルを取り出して山猿を確保して安全と思える地点まで連れて行った。

よっちゃんは、M蔵の声を聞いて自分が生きていたことを実感した。ピッケルにしがみついていたが恐怖が身体をこわばらせて立ってない。凄いい恐怖心が心を支配して歩けない。立てないのだ。斜面が急に思え「もし滑つたら止まらない……」

先ほど山猿が滑つてきた時には感じなかつた恐怖が全身を覆つていた。一度死に掛けた瞬間の後に来る恐れで、危険が終わつていない恐怖であつた。一年生たちはM蔵と由への指示で聖岳の途中から引き返し、安全と思える場所待機していた。山猿もその中にいた。

よっちゃんも早く彼らの方へ行きたいのだが、怖くて歩けない。そのことを何故か言えない。もどかしく恐ろしい時間であつた。どれだけの時間が経つたか分からない程に長く感じられた。

そんな気分を変える出来事が起つた。東京のT大の山スキー部の五人パーチーが聖岳から下りて来て「どうされました? よければザイルを貸しましょうか」と言ってくれた。

その瞬間、よっちゃんはこれで助かつたと思ふ妙な安堵感を持つた。

## 介護の現場で思う

科野 山猿

週に一度、植物状態で寝たきりのお袋の健康状態をチェックする訪問看護がある。体温、血圧、心拍、酸素飽和度を測り、身体全体を熱いタオルで拭きながら体調変化の兆しがないか、すみずみまでみる。それから上体を起こして、ベッドに座らせ、お袋の身体を支えながら寄り添う。その状態のままだいたい二十分ほど過ごすのであるが、そのあいだに僕は看護婦からいろいろな体談を聞く。

彼女(いまのところ彼ははいない)たちは、およそ三十人ほどの要介護者を受けもつていて、現場でさまざまな人々に接する。先週訪れた看護婦は、介護家庭の貧窮した事例をいくつかあげて、ため息をつくようにつぶやいた「いっそのこと介護制度なんか、ないほうがいい」と。

基本的に五段階に分けられる介護度によって、持ち点のようなものが決められていて、その範囲内でサービスのやりくりをしなければならぬ。超過すると、その負担は十割となる。査定が厳しく介護度が軽く決められると、サービスを受けられる幅が狭まり、希望するサービスが受けたくても受けら

れない。せっかくサービスがあっても、金銭的余裕がなくて利用できない被介護者がけっこういるのである。そういう人たちは健康に支障をきたしやすいため、当然、医療機関を利用しなければならぬ機会も多くなる。医療、介護にかかる費用は日常生活を逼迫させているのだ。ほんとうに必要な人たちが介護サービスを受けられないくらいなら、ないほうがましだ、と彼女はいうのである。

民間にできることは民間へといって、介護制度にも市場の競争原理を採り入れた。市場原理とは弱肉強食の冷徹な原理だ。この原理があたかも自然の摂理のごとき絶対なものであり、普遍性があるがごとく考えるのが新自由主義だ。

努力して勝ったものがむくわれる社会を、といって、勝者の例としてホリエモンのような成功者をあげた。いっぽう競争社会に生きえないもの、あるいは競争に負けたものは、路頭に投げだされても、それは自己責任として甘んじて受けいれなければならない。小泉・竹中がすすめてきた日本のアメリカ化は、日本の社会がもっていた何か大切なものを壊してしまった。

リハビリを必要とする身障者や、介護の手を借りなければ生きていけないお年寄り、何も生産せず費用がかか

るだけなので、社会のお荷物なのだろう。だから障害者自立支援法のような法律をつくって、弱者を切りすてる。介護費用の負担増をかさねていく。

現在あらわれてきている問題や矛盾は、「改革」を進めていけば解消するようなことを竹中平蔵氏という。それは詭弁だろう。さらに「改革」し民営化を進めれば、よりよい社会が実現するという、そんな進歩史観のような言説は受け入れられない。もう「改革」の正体がばれてしまっているのだ。それにしても、新自由主義は政界にも財界(当然だが)にも根強い。

この国にかつてあった人情は、いまや薄っぺらな同情程度のものになってしまったのだろうか。あるいは消えつつあるのか。人情深い話をひとつ。

ときは幕末、欧米列強が日本に訪れ、開国をせまり、条約をむすぼうとしていた頃にさかのぼる。ペリー艦隊の浦賀来港が日本を震撼させた一八五三年、そして五四年、五五年と、たてつづけに大地震に日本が揺さぶられる。

五三年二月には相模国大地震、五四年六月には近畿大地震、一月には西日本一帯、駿河から相模一帯を大地震が襲った。そして五五年には江戸で、七千を超える犠牲者を出した安政大地震が起こる。

なかでも五四年一二月相模を襲った

地震は大津波を発生させ、下田町ほぼ壊滅した。津波は下田湾に停泊中だったブチャーチンのロシア軍艦ディアナ号も襲い、沈没させてしまう。

このとき、冷たい海に投げ出され凍死の危機に瀕したおよそ五〇〇人のロシア兵を助けたのは、駿河湾北岸の村人たちであった。早朝から村人男女がかけつけてきて、冷えきって震えていたロシア人に、自分の上着を脱いで与えたり、食べ物を提供した。ロシア人には信じられぬ出来事であった。感激したディアナ号のマホフ司祭は「善良な、まことに善良な、博愛にみちた民衆よ! この善男善女に永遠に幸せあれ」と手記にしている。

村人たちも大きな被害を受けていたのだ。家は壊れ、死傷者も少なくなかった。そんな状況にもかかわらず、瀕死のロシア人たちを救ったのである。

いっぽうで、『日本残酷物語』ではこんな話が語られる。難破船が浜に打ち上げられると、村民は鳶口をもって船員の息の根を止めに行く。そして積み荷を掠奪するのだ。たえず飢えと背中合わせに生きる村人は、盗らなければ生きていけない。生きるためには、もてるものから掠奪してもいいんだ発想である。このモラルを超えた行為は、庶民を押さえつけ収奪するお上や富めるものに対する復讐も含んでいる。

## 夏の食事で大切なこと

藤井寺 笑美

そろそろ、ビールやジュースにアイスクリーム、そうめんなど、冷たくてのど越しの良いものがおいしく感じられる季節になってきました。暑い時やお風呂上りの一杯は最高に美味しいですね。食欲がない時には、のど越しの良いものがつい欲しくなってしまう

でも、のど越しや美味しさにまかせて欲しいままに食べていると、栄養のバランスが崩れ、体はだるく、気力も失われ、はたまた胃腸の調子を損ねたり…と言うような事になってしまします。そんな不快な経験をした人もきっとおられるのではないのでしょうか。これらの摂りすぎは、糖質や脂肪が多く太る原因になることはもちろんのこと、ビタミンやミネラルの不足を招きます。

だからといって、手っ取り早くビタミンやミネラルたっぷり？の野菜ジュースを飲めば大丈夫という考え方はもつてのほかです。体力が低下しているような状態で、冷たい飲み物をたくさん飲むと胃酸が薄まり、消化力が衰えてさらに食欲不振をおこし、胃酸による殺菌作用を低下させてしまうことになりかねません。

特に夏の食事は、量より質が大切です。

蒸し蒸しと暑い時は、食欲もわいてこないものです。無理して食べるのは逆効果というものです。あまり食べられない時は、食事の量より質を考えて効率よく摂りたいものです。

まず摂りたいのは、良質のたんぱく質。さっぱりと麺類などで食事をすませるときも、少量でよいので、卵、肉、魚、豆類などをトッピングするといいでしょう。例えば、冷やし中華で食べようとしたならハムや卵、きゅうりやトマトなどをトッピングしませんか。

でも、冷やしそうめんやざるそばになると、麺オンリーで済ませたりしていませんか。つるつると口に心地よく滑り込んでいくものだから、それだけで満足してしまいます。そんな麺だけのような食事は避け、炭水化物以外の栄養素も一緒に食べるように気をつけたいものです。のど越しのよい麺類を多く食べる夏、もしかしたら、麺類の食べ方の違いが、夏バテの程度を左右するかもしれませんよ。

また、汗をよくかく季節ですから、水分補給はとっても大切です。しかし飲み方には気をつけなければなりません。汗をかいたあとだからといって、水やお茶を急激に大量に摂取すると、消化・吸収機能を弱めてしまうことがあります。また、水の代わりにジュ-

スやビールをたくさん飲むとカロリーのとりすぎにもなり、ビタミンを消耗してしまい体力の低下を招いてしまいます。

ビール好きの人は、ビールはアルコールの入った水分だ！水分補給のためにしっかりと飲まなくちゃ…と言いつつ、飲みながら飲んでいませんか？ビールを飲むと、アルコールの分解過程で水分が取り込まれ、飲んだ量の一・五倍が尿として排泄されるそうです。却って水分不足になっている可能性もあります。

それから、スポーツドリンクでの補給にも注意が必要です。スポーツドリンクの中には、飲みやすくするため、糖分をたくさん含んでいるものもあります。水代わりに飲むのは避けたいものです。

ちなみに、缶ビール三五〇ccで約一四〇キロカロリーあります。いくらおいしくてもいつまでもひと口のおいしさが続くことはありません。

夏の食事は、効率よくとり、水分補給には注意が必要です。「夏バテして…」とか「夏痩せどころか夏太りした…」といったセリフをつぶやかなくていい、楽しい夏にしたいものですね。



## 携帯エッセイ▼⑩

### 「姨捨山」

母の介護をしながら、折につけ、頭に浮かんだ小説があった。学生時代に読んだ深沢七郎の『楢山節考』だ。息子が老いた母を背負って山に捨てに行く。酷い話だ、と思ったものだ。しかし、今はそうは思えない。

（姨捨はそんなに忌み嫌う風習ではない。人間の自然な営みではなかったのか）と思う。

人間は、死期を悟ったら、自発的に姿を消すべきなのかも知れない。私が幼い頃、飼っていた猫もそうだった。老いると、ある日、突然居なくなった。こんな話もある。和歌山県では、昔、老人が死期を迎えると、飾り付けをした船に乗せて海に流した。精霊流しを連想する話である。

考えてみれば老人ホームは現代の姨捨山だ。何も綺麗事を言うことはない。むしろ、姨捨山であることに積極的になるべきだ。

ノールウェイを旅した時に、観光ガイドからノールウェイにも姨捨てがあった、と聞いた。ただ、捨て方は日本と大分、異なる。老人を崖ぶちまで連れて行って、そこから突き落とすのだという。

「なんと残酷な！」と私は眉をしかめ

た。するとガイドは、言った。「日本人は全員、そう言います。しかし、ノールウェイ人は一瞬に命を絶った方が本人にとつては優しい。放置して狼にでも襲われたらどうするのか。その方が余程、残酷ではないのか、と言うでしょう」なる程、と妙に感心したのを覚えてゐる。それは兎も角、大切なのは今がどうなのか、という事だ。

日本では公営の老人ホームには二人に一人しか入居できない。そのために悲惨な事件が絶えない。最近も、女優の清水由紀子さんが、介護疲れから、墓前で母親と心中しようとした。でも結局、母親を殺せず、自分だけ死んだ。一方、ノールウェイは、全ての国民が介護施設に入ることが出来る。国民は貯金をしてなくても将来に不安を持つていない。

今の介護制度を見る限りでは、ノールウェイより日本の方が残酷だ。(熊)



## 職業観の未熟な社会

明石幸次郎

アメリカでは早くから、キャリアアカウンセラーと言う心理学、キャリア形成の理論、カウンセリング、職業情報などの知識を持った専門家が学校に入り、カリキュラムとして、先生に代わり生徒の進路指導(支援)にあたつて、早くから職業意識に目覚めさせているようです。

最近、大阪の橋下知事も高校にこのような専門家をに入れて、先生に代わり進路支援を行うといった新聞記事がありました。それは、大阪が高校生の中心者が全国一で、社会に出て自立、自活が出来ず、その結果、若い人の生活保護受給者も全国有数という憂慮すべき事態になってしまつていふように、これを何とか改善しようという知事の思いからなのでしょう。

既に鹿児島県では、高校にキャリアカウンセラーのような専門家がいて、生徒の自己概念の形成と将来の職業意識を高める支援を行つて、それなりの成果を出しているようです。

このように高校時代から専門家によるカウンセリングなどにより職業に対する意識を目覚めさせ、自分の将来像

を描きながら、やりたい仕事は何かを考えさせる機会を作るといふことは大変重要なことです。

私など高校三年生の進路指導の時に担任の先生から言われたことは、だだ一つ「お前の成績では、この大学しか行けないぞ。ここに行け」と、これだけでした。

進路指導は成績に応じて入れる大学を振り分ける指導ではなく、文部科学省が定めた「中学校・高等学校進路指導の手引き」によると少し長くなるのですが、

「進路指導は生徒一人一人が、自分の将来の生き方への関心を深め、自分の能力・適性等の発見と開発に努め、進路の世界への知見を広めかつ深め、やがて自分の将来の展望を持ち、進路の選択・計画をし、卒業後の生活により良く適応し、社会的・職業的自己実現を達成していくことに必要な生徒の自己指導能力の伸長を目指す、教員の組織的・継続的な指導・援助の過程である」

と記されて、高等学校では、自己理解の深化と自己受容、選択基準としての職業観・勤労観の確立、将来設計の立案と社会的移行の準備、進路の現実吟味と試行的参加が進路指導の目標とされています。

さすがに文部科学省の中央官僚は頭

が良く自分自身も高い目標を実行してきただけに、理想的な指導内容を現場の先生に通達はしていますが、出来ていかどうかのフォローもないし、出来なければ何故出来ないかを現場と一緒に考えることもしないで、現場の先生だけに押し付けているのが現状で、実態は文部官僚の理想通りにはならず、自己概念の未確立な、何をしても良いかが解らない職業観の希薄な生徒を社会、大学に送り出し続けています。

それは、基本的には大学においても同様です。大学は一人でも多くの学生を一部上場企業、役所に入れることに大学の存在を賭けて力を入れています。高校が兎に角、社会と大学に生徒を送り込むことだけを指導して、又、大学はどこかの組織に就職という形で送り込むことだけに力を入れているような実態では、折角、親の期待通りに就職したのに、そこを辞めて自分探しをする為に又転々と職業を代えてしまう若者を増やし続けてしまっています。

第三期の職業キャリアの確立期である四〇歳を超えてもまだ、摸索期にあるような人間を増やしている今の社会は教育だけではない、家庭を含む社会全体が正常な状態ではないのです。

そういう私も六〇歳を前にして自分探しをしています。これも職業観が未熟であった為でしょうか。

## 出家 上

連載 仏と共に ②

上原むつえ

私が生まれた上原家は病人が絶えず出て、近所の人たちは「婿が来てから上原家はさっぱりじゃ。しまいには財産を食いつぶしてしまおうぞ」などと、婿養子である父が疫病神であるかのように噂したものです。私は八人姉妹の六番目ですが、姉二人は若くして病で亡くなりました。

そんな家族にふりかかる病難に対して幼い頃「どうしてわが家には病人が絶えないのだろうか？」と不審に思い、何ともいえない不安が私の中にふくらんでいきました。私自身も小学二年生のとき大腸カタルにかかって死線をさまよい、危ういところから生きかえったのです。医者が父に「もう二時間くらいいの命です」といったことをはつきり憶えています。家族は内臓系の病気が多かった。そんな状況ですから、いつも家族の誰かが遠くの病院に入院していました。家族の誰かが病魔におかされ家にいないという寂しさが心にしみ、胸が押しつぶされるような不安にたえずさいなまれていたのです。

高等女学校に進むころ、十三歳のときだったと思います。「得体の知れない

何かわが家に取り憑いて、家族を苦しめているに違いない。その何かを知りたい」という強い好奇心が私を身延山へむかわせたのです。なぜ身延山かというと、家の宗旨が日蓮宗で、総本山が身延山だったからです。いろいろな宗派のうちもっともなじみが深かったのです。

学校の勉強を終えてから夕方、汽車賃をもらい一人身延山へ法話を聞きに行きました。法話を聞いても、よくわかりませんし、私の悩みを解決できるのかもわかりません。もっともっと勉強しなければいけないと思い、私の身延山詣ではじまります。それから数えきれないほど何十回と通いました。片道二時間程かかりますので、帰宅は翌朝ということもたびたびありました。

それから仏教関係の書籍をたくさん読みました。受験勉強の合間に仏教の勉強をしたのです。日本の仏教宗派は十二あります。いろいろな本を読んだり、それぞれの仏門の人に聞いても、宗派の違いや相違点を教えてくれません。どの宗派の人も「自分の宗派が一番で他の宗派はわかりません」という。ですから、どこの宗派が自分に適しているのか、自分で研究しなければなりませんでした。

中学から専門学校へ進む頃からまず



まず仏教の勉強に熱が入りました。ですが、父の私への思いやりをないがしろにすることはできません。姉は秀才で医者になりました。私も医者にしようと父はつよく望んで、私には何かと気をかけてよくしてくれましたので、父の期待を無下にすることはできません。学校の勉強も一生懸命にしました。

わが家は富士山の裾野にある大淵村の旧家です。母は二十九代目になります。お茶の栽培、製茶が家業で、多くの人が働きに来ていました。農繁期には二百人ほど来ていたと思います。家も五反屋敷といわれるほど大きな構えでした。そんな家に婿養子として入った父は辛い立場にあつただろうと思います。そんな父は、私にはいつもよくかわいがってくれました。幼いころいつも父と一緒に寝ました。母と寝た記憶はありません。母は妹たちの世話に手が取られていたからだと思います。

東京大空襲の後、病気になるまで母を自

宅で三年半介護しましたので、学校はその間休学しました。母の介護から手が離れると、復学します。一生懸命勉強して、昭和三十一（一九五六）年の二月、二十七歳で医師の国家試験を受けて合格しました。その年の八月二十日卒業式を終えて、翌日横須賀市にある小さな寺で出家したのです。この寺には偉いお坊さんがいることは、本を読んで知っていました。

出家した当日の朝、静岡の生家では姉たちが珍しく里帰りしていました。父に「何かあつたんですか？ 昨夜、この五反屋敷いっぱいになすの花が咲いている夢を見たものですから、急いで帰って来ました」と父の顔を見るなり二人の姉が尋ねたそうです。父は落ち着いて「今むつえから電報が来た。出家したらいい」とつぶやいた。続けて父は「ナスの花は千に一つも無駄はない」といったそうです。

当時の横須賀の街角には、進駐軍兵士相手のパンパンガールといわれた私娼たちが多く立っていました。生まれながらの赤子を寺に捨てるようなことも珍しくありませんでした。そういう貧しくすさんだ世相だったので。性病が米軍内に広がり、問題になっていました。私たちは、梅毒に感染した女の人を助けるために、品切れになく

くつたサルバルサン606と呼ばれる治療薬を手に入れるために米兵と交渉して、何人もの感染者を治療したこともあります。

仏門に入ると、想像していた世界とはまったく違います。師弟関係の厳しいタテ社会でした。出家した寺の住職である師匠は絶対の存在です。師匠の承諾なしには何もできません。私のように後を継ぐ寺がなくて出家する人は滅多にいません。まして尼僧です。そんな事情も知らず出家した私を待っていたのは、厳しい現実でした。

いま振り返って出家の動機はなんだったのかといえば、一番目には、病人の絶えない家に取り憑いている疫病神のような、得体の知れない物の怪を取り除きたかったことです。二番目は、空襲で犠牲になった友人たちや戦争でなくなった多くの人たちの霊を慰めなければならぬと思った。三番目は、仏教の深遠な哲理を研究したいということです。

終戦直後の、食べることに精一杯というドサクサの時代に、何もわからずただ仏にすがってこれからの生き方をきりひらきたいという思いで、仏門に飛び込んだわけですが、医師になっても勉強がたいへんですが、仏の世界に入っても日夜ひたすら勉強の日々でした。

## クイズ

### 「荒木村重の信長への謀反」

福嶋 努

高槻城主となった高山右近にとって、十三年足らずの城主期間中で最大の危機ともいえるべき事件が、一五七八年（天正六年）に起こりました。

右近の主人に当たる摂津守護荒木村重が、石山本願寺・毛利氏と結んで、織田信長に反旗をひるがえすという事件でした。荒木村重は、右近にとって直属の上司であるばかりか、高槻城主に登用してくれた恩人でもありましたから、当然のこととして、右近は村重に従ったのでした。

そのことは、同時に、右近の立場を脅かす重大な危機をもたらすことになりました。

村重の謀反は、信長にとって、他のどの大名の場合よりも大きな衝撃だったにちがいないとみられます。摂津の国は、彼の天下統一のために欠くことのできない最重要地点でありました。このときまでに、信長の命を受けて毛利氏と戦っていた羽柴秀吉軍は、背後から脅かされることにもなりました。まさに信長を窮地におとし入れる村重の反乱でした。

このころ、信長は、秀吉には播磨の三木城を攻めさせておりましたが、秀吉は思うようにならない三木城攻防にいら立って、何度も信長自身の出馬を要請していたのでしたが、信長自身は動こうとはしませんでした。

それなのに、村重謀反の報に接するやいなや、すぐさま信長は大軍をひきいて高槻・茨木方面へ攻め入りました。織田信忠、信雄、信包など織田一族と、前田利家、明智光秀など信長直参の家臣団をすべて呼び寄せて、自ら陣頭指揮をとって出陣したのでした。

大軍をひきいて高槻へやってきた信長は、安満の山手に本陣をかまえ、安満山、天神山にとりでをつくりました。安満は、近年、古墳と三角縁神獣鏡が見つかつた「安満宮山古墳」のある安満山のことで、標高はあまり高くない百メートル余りの丘陵ですが、遮るものがないので、「①」の対岸の樟葉、枚方はもちろん、大阪平野から遠くは淡路島まで一望できる高台でありました。

こうして高槻は、織田信長の軍に包囲され、全滅の危機が近づいたのでした。天正六年十一月のことでした。

（問）文章の「①」に当てはまる言葉を、次のア、イ、ウから一つ選んでください。

ア、芥川 イ、松尾川 ウ、淀川

#### 参考文献

「戦国時代の高槻」 高槻市教育委員会  
「右近再考」 能勢初枝  
「北摂歴史散歩」 （高槻・茨木・島本編）  
横山高治

☆「芥川だより」三十四号のクイズの答えは（ア、荒木村重）でした。

#### 俳句

蓑女

- 蛙鳴く張り水田やパイプする
- 清流や淡き日かえるホタル見ゆ
- 万緑を溶かして飲むや同窓会
- 新茶着未だ見ぬ友よありがとう
- 青空のどこまで続く梅雨休み
- 角帽の子規の写し絵伊予初夏
- 同宿の遍路よく喰べよく笑う
- 五月雨や瞳を入れぬ人形展

直子

ホタル

♪ 蛍の光 窓の雪 …♪  
と唄った卒業式。

六十年振りに、蛍が飛ぶのを見た。真っ暗な川辺を集団で、あちこち点々と火をともしながら、スイスイと川面を飛ぶ。成虫になってから光ると思っていた蛍が、卵の時から淡い光を発しているらしい。

水や土の中でも光っている。蛍は大人になると水しか飲まないのです、排泄物が出さない。幼虫時代に食べたものを栄養分として貯金して生きて

いるらしい。この栄養を消費し切った時に寿命が尽きる。現に発している光は、まさに「命の光」だと、甥っ子の説明を聞き入っている間に夜は更けてゆく。故郷へ帰って。

熱中症対策——定期的に水分を

梅雨期になると熱中症という言葉聞く。今までそんな心にとめず暮らしてきたのに。炎天下での激しい運動や作業中にだけでなく、室内でかかるケースもあるという。熱中症とは、体に熱がこもり体温が調節出来なくなった状態をいう。

私たちの体は常に汗をかいている。汗は体から熱を発散して体温が上昇しすぎるのを防ぐ。汗によつ

て失われた水分を補給しないと脱水状態になり、体温調節が出来なくなる。

一人でいると食欲の低下、足腰の筋肉痛や頭痛をバツプアリンで抑えて間に合わせる。深く追求することもなく暮らしてきたが、水分を取るタイミングは三回の食事の時と入浴の前後。外出の時は水筒を持参して、のどが渴いたら飲むのではなく定期的な水分補給が大切という事です。

これからが大切

どんな嫌な人でも、必ずいい点がある。あの人には、自分にはないいい点があると思えばいい。絶えず自問しなくてはならないが。

小沢代表の辞任は止むを得なかった。辞める時期がおそかったのか適切なのかは私には分からない。

甥っ子に話しかけたら、ひとこと反論あり。「誰がなっても同じや、国民の事なんか考えていやせん。もっと早くはじめをつけたらいいのに」。私も同感。めがね越に見ていた新聞の記事もむなしくなり。「これからは大事なんだ。将来の日本をこうしたいという政治信念を持った人材を選ぶべき」と力強く言つて甥っ子との対談おわり。

を痛め、複雑な気持ちを抱き今後の行方を見守りたい。

麻生さん！すっかりしなはれー

心の中の私から  
八十代も半ばになると、体力・気力・記憶力・判断力が著しく減退してゆく。六十代だったころは、それなりに出来ていたのだが、もう後戻りは出来ない。

そこで頭をひとひねり。私の心の中に、六十代だった頃の自分を振り返る。

現在自分は一人暮らしなのだ。落ち込んでいようと、苦しんでいようと勝手気まま。

勝手に口で新聞代を支払った後、そこに置いたはずのサイフがない。そんな馬鹿な、わずかの間の記憶すらなく必死でさがしたが出てこない。いよいよ認知症か、頭の中が真っ白になってしまった。あせりと両方

が混乱してしまつて、あきらめようと思つた瞬間に「ちよつと落ち着いてよ。家の中できつと見つかるよ」心のささやきが聞こえてくる。

気づかれのあまり、ぼんやり、その後念のために別の部屋に置いていた靴をのぞく。サイフが鎮座してござる。なんと、いつこの中へ入れたの？ ハアッーと大きなため息が出た。ヤレヤレ、これからもこんな事が何回起るだろうかなあ。

六十代の頃の私が、きつと「しつかりしなきゃ」と心の中から守つてくれる事を信じて、元気を取り戻してゆく昨今である。

編集後記

「江戸っ子エンちゃん」は今回は休ませて頂きました。次号をお楽しみに。いよいよ夏本番です。盆休みの計画は如何ですか。我が家は、近くの寄席で怖い怪談話でも聞こうかなと考えてます。

7月 芥川商店街催し

☆☆☆

中元大売出し

7月4日(土)～12日(日)

ガラガラ抽選

- 1等 20,000円
- 2等 1万円    3等 1千円
- 4等 500円    5等 五十円

セール夏素材

麻・紗・綿

涼しい夏を

7月6・7・8日

着物から服を仕立てます

梵~ぼん~